



富士山世界遺産センター(仮称)は2016年度中に完成予定

富士山静岡空港のバース画
(2015年度中完成予定)

坂 茂 (ばん しげる)

建築家 1957年東京生まれ。クーバー・ユニオン建築学部を卒業後、磯崎新アトリエを経て1985年に坂茂建築設計を設立。1995年から2000年まで国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) コンサルタント、同年にNGO VAN設立。現在、京都造形芸術大学芸術学部環境デザイン学科教授。震災地復興支援で紙管や海上コンテナで仮設住宅を建てたことは記憶に新しい。

県産材を活用：素晴らしい施設が誕生

上空600m。輝く駿河湾を眼下に着陸体制に入ろうとする飛行機。周辺環境に馴染んだ茶畑のような構造の空港が迎える。世界文化遺産となった霊峰富士を讃えるように建つ「逆さ富士」をモチーフにした建造物、足もとには湧水が流れる。そんな施設ができたならどんなに素晴らしいことだろう。

提案した人物がいる。坂 茂(ばん しげる)、建築界のノーベル賞といわれる「プリツカー賞」を2014年5月に受賞した気鋭の建築家だ。坂氏は静岡県が2014年1月に公募した「富士山世界遺産センター(仮称)」と同年5月公募の「富士山静岡空港旅客ターミナル

ビル等改修・増築工事」の設計プロポーザル[※]に見事に応え、最優秀者に選ばれた。ターミナルビル案では、雨水の再利用や日の光や風を取り込んでの心地よさの醸成が図られる。特筆すべきは足もとから天井に伸びる世界初のツイスト木造集成材アーチである。屋根には緑青の銅板が葺かれ、牧之原台地の茶畑がシンボル化される。アーチに使用されるのは静岡県産の木材だ。

富士山世界遺産センター(仮称)は、世界文化遺産としての富士山を守り、後世に継承するための拠点として整備される施設である。建物の形状は逆さ富士、その足元に湧水を湛え正富士を

映し出すというもの。この施設の外壁は螺旋格子の木組みで構成され、やはり県産材が用いられるという。

「木の建築、加工技術において日本は後進国」と説く坂氏が提示したプランはどちらも斬新・独創的でありながら、木材の可能性を提示しつつ、施設の用途・目的に最も叶った提案だと静岡県は評する。完成すれば県の名所となり、やがては県民の誇りともなるであろう。

[※]専門的技術が要求される業務を外部委託する際、一定の条件を満たす提案者を公募又は指名し、受託者を選定する方式。



もり 森林の生活：自分の落ちつく場所

山道に静寂が流れる初冬の富士山四合目付近。うっそうとした森の中に重機の音とともに鮮やかな黄色の人影が現れた。

静岡市清水区に本社を置く林業会社、株式会社ソマウッドが作業を行っている現場である。この日は富士山登山道の景観整備のための間伐を行っていた。作業員の中で、たくましくというよりも、しなやかにチェーンソーを操る渡辺由貴子さんは2013年入社の人である。

島田市出身の彼女は高校卒業後、東京の写真専門学校に進む中、自分が好む被写体が身近な木々であり、森に癒されることにも気づいたという。それ

は、森林に関わる仕事に就きたいという思いに変わっていった。Uターン後、静岡県が主催する林業のガイダンスや就職支援講習に参加したり、自伐林家を訪ねたりして働く場を求めた。フェイスブックでつながった地元の林業女子会からも情報やアドバイスを得て、ソマウッドの門戸を叩くこととなった。

ソマウッドの久米社長は林業の世界に次代の息吹を吹き込む若き起業家だ。女性の渡辺さんの採用は彼の目指す新しい林業の要素のひとつなのだろう。

現在、渡辺さんは会社の隣室を借りて住んでいる。朝4時前には起きて、6時30分に現場に向けて出発する。生

活水は湧水、薪ストーブでご飯を炊く。日課は大家さんの愛犬の散歩だ。林業と田舎暮らしを実践する。

「最初はスギとヒノキの違いも分からなかったんです。森林には、もともと人の手が入っていて、手入れをしないと荒廃してしまうことも知りました。」森林の仕事も暮らしも自分の性格に合っていて、落ち着いて向き合えているそうだ。

渡辺さんのいる森林がとても新鮮に見えてきた。彼女に続く若い世代の山守の出現を予感させてくれる。

株式会社ソマウッド
渡辺 由貴子(中央)